

鴻 koh

月刊俳句誌

令和2年6月1日発行

(毎月1回1日発行)

第15巻第6号 通巻168号

6 月号

2020



御陵の実生のくぬぎ春の雨

さくらさくら坂東太郎越しの風

ふうはりと風車の廻る三鬼の忌

青き踏み鷹の岬へゆく途中

いちめんの菜の花に雨そして雨

登四郎も白潮もなし花の沖

釈迦生れし日なり遠くの山を見る

亀鳴くを信じるほどの亀の数

還らざる餅が一つ仏生会

けふ静かけふ豊かなり花吹雪

猩々袴ひとりふたりと立ち止まる

コロナウィルス縦横に蜷の道

しんしんと花篝夜の更けてゆく

そして雨

主宰作品

増成栗人

詩 作品抄

蝶よ 蝶よ 十三体の野の仏

石垣真理子

更紗木瓜市のはづれの店先に

荒井一代

母からの文のやうなる春の雪

北原沙織

やはらかき日差しが五人囃子にも

和田遊

バーガーにチーズたつぷり春の昼

佐藤慧美子

梅見茶屋小さき靴が真ん中に

佐藤あさ子

大字小字ふうはり包み春の雪

小林良作

囀や鈴ふるやうに雀どち

青木まゆ美

朧夜の窓よりピアノ四重奏

美濃律子

雛の間ににほひ袋の香のほのか

神野未友紀

筑波山麓うつらうつらと蝶の飛ぶ

坂入喜代枝

うふうふと内緒のはなし桃の花

野村昌代

彼岸西風足の三里に灸を据え

伊藤真代

魚は氷に佃の路地の地藏尊

田邑利宏

大川に北帰を前の鴨百羽

守屋吉郎

銭湯の夫を待つ間の半仙戯

内藤康子

啓蟄や馴染みの揃ひたる酒場

鈴木崇

喉通る白湯のやさしさ風邪籠る

山岸明子

佗助や茶人でありし母のこと

北川博司



『加藤秋邨句集―猫―』

ふらんす堂・刊

先月号で『芥川龍之介句集―夕ごころ―』を紹介したところ、谷口摩耶編集長から「この精選句集シリーズは私も何冊か持っているけど、その中の『加藤秋邨句集―猫―』も面白いわよ」とご教授いただいた。すぐに手に入れて読んでみたところ、摩耶さんの言葉通り面白かったので、今回、取り上げることにした。

「百代の過客しんがり猫の子も」

この秋邨の有名な句を知ってはいいたが、他にも多くの「猫句」があるのは知らなかった。『加藤秋邨句集―猫―』は、サブタイトルにもあるように、秋邨が猫を題材にして詠んだ句ばかりが収録されている。秋邨は終生、多くの猫を飼い、家族のように接していたという。それを知ってからの句を読むと、印象が変わった。「百代の〜」は、突然思い立って猫を詠んだのではなく、日常の

暮しの中でふと湧いた吟だったのである。芭蕉の紀行文『奥の細道』の序文にある「月日は百代の過客にして、行

かう年も又旅人也」から受けたインスピレーションを、猫に託した秋邨の心持の温みに、僕は気付かされたのだった。

「爆音や霜の崖より猫ひらめく」

昭和十九年十二月二十一日戦局苛烈の報あり 午後九時、一機侵入、照空燈しきりなり” という添え書きがある。「ひらめく」という動詞が鮮烈だ。戦時の危機一髪に崖から飛ぶ猫の動作は、首都の上空を舞う敵国戦闘機の様子と重なりながら、ひたすら逃げるしかない一般市民の切迫した心情そのものである。

「青風猫には戦ぐねこじやらし」

「掌をなめて鼻撫でて猫露うこく」
「露のんで猫の白さの極まるなり」

に載る猫もまた、新年を寿ぐ飾りの一つになるのだった。
「猫我を呼ぶなり枯れし野のひろがり」
「くすぐつたいぞ円空仏に子猫の手」

秋邨にとって、猫は家族であると同時に、秋邨自身への問い掛けに応える存在でもあった。「猫我を」の句は、世界にたった一人で立ち向かう秋邨の孤高を表わしている。反対に「円空仏」の句は、自らにある童心を手放して猫に託して微笑ましい。
こうした秋邨の「猫句」に加えて、この一冊には嬉しいオマケが二つ付いている。まずは巻末に収録された小説『四十番地の猫』だ。自伝ともとれるこの短編は、東京の勤め人暮しの機微と、それにまつわる猫の様子が描かれている。

「露地の子におのおの霜を踏む父あり」
小説の冒頭には、この句が置かれている。路地を近づいてくるお父さんの靴音を聴く、子供たちと猫がいる。近所の猫が作る社会が家族の話題の一つになったりするのだが、観察が細かく



猫の生態を詠んだ句群である。「青風」の句は、思わずねこじやらしに目が行ってしまふ秋邨の観察が面白い。言葉遊びから発して、揺れるねこじやらしに反応する猫の具体的な動きが見えてくる。「掌をなめて」は、まるで露に猫の動きが映っているように感じられる写生の句だ。三句目は、「露」を飲んで猫が白くなるわけはないが、芭蕉の「石山の石より白く秋の風」という句を思い起こさせる含みがある。「露」という微細な季語の二ノアンスを、秋邨は猫を通して確かに把握

て面白い。何より、倫理や道徳など人間の思惑を排除した客観的な捉え方に共感する。
僕は自肅の日々を近所の散歩に費やしているのだが、雑司ヶ谷あたりはこの小説の舞台とほど近く、地域猫の天下なので、とても興味深く読んだ。軒を接して建てられた住宅街は、昭和の香りが漂っていて、一画には小さな八百屋さんや魚屋さんがひっそりと商売を営んでいる。その周辺を猫が気ままに歩いている様に、毎日癒されている。

もう一つのオマケは葉で、詩人の谷川俊太郎が短いエッセイを寄稿している。これもまた猫を媒介にして、人間模様をクールに描く。家族でさえもお互いの本当の気持ちからならないことがしばしばある。そのことを猫に託して語るのには、秋邨に通じてもいて、実に価値のある葉になっている。谷川はこの短文を、秋邨の次の句を置いて締めくくっていて、豊かな余韻を添えることとなった。
「生れたる猫の子われの膝と逢ふ 秋邨」

くつゝ。

「恋猫の皿紙めてすぐ鳴きにゆく」

「猫の恋声まねをれば切なくなる」
秋邨は恋猫も好んで詠んだ。春が来ると、猫たちの行動は豹変する。他の季節には何事にも執心しないように見えた猫が、大きな声で鳴き、激しく争う。「皿なめてすぐ」に生命活動の最前線に戻る猫の忙しなさが描かれている。だからこそ「声」を真似ると、そんな猫の気持ちを知れて切なくなるの

だろう。

「豆撒の猫疾駆して終りけり」

「猫かへり年送る顔揃ひけり」

「猫乗れば猫もろとも飾り白」
秋邨は猫を家族として扱った。節分の夜の子供たちの豆撒きは、猫にとっても大事。鬼をやらう意味は分からなくとも、家族の安寧を祈る「騒ぎ」だということとは承知しているのだらう。その騒ぎに、猫は疾駆することで参加するのだった。大晦日もまた、家族の大切な行事。加藤家では、猫の顔も揃ってこそその年送りとなる。そして白の上

「汗」は代謝により哺乳類の汗腺から分泌される排出物。体温調節の作用の他、人は精神的緊張により出ることもある。

季語は夏、汗ばむ、玉の汗、汗みどろ、油汗、汗流る、汗臭し、汗光る、汗の粒等々。年々、地球の気温が上昇する中、私達はどれだけ体温調節が出来るだろうか心配である。

大志とは無縁の汗を拭ひけり

兼志

汗

特集

「汗」——特集

◇息子とゴメン

中川幸恵

クリスマスの前日、子ども達と買物を終え帰宅。車を降り降りようとした時「マママーケント（未っ子がいないよ!）」と娘の声。その言葉に毛穴全開、冷や汗が流れた。「店に忘れた!」急いで車をウターン。こんな時に限り赤信号ばかり。気持ちばかりが焦り冬だというのに汗、汗。店につき一目散にスカウターへ。「子どもも忘れまして!」その言葉に店員さん達は失笑。無事保護されていた

ている気がします。ちよつと五月飾りを出す時期だからです。我が家のものは、兜と巨足刀だけのシンプルなもので、大きさも六センチ四方の箱に乗るくらい。飾るのも簡単で、黒地に金で龍が描かれた屏風が少し重たい程度です。それでも名古屋の四月はあたたかく、飾り付けていると背中が汗ばんできます。

早く飾り終えて着替えたい反面、春が来たんだなという感慨や、我が子の成長を感じて、ちよつとキョンとしてしまつ飾り付け。背中の汗がひんやりするのに違和感を覚えなが

シヨート エッセイ 汗・アラカルト

息子を抱きしめた時の安堵感と恥ずかしさ。またやってしまったとは口が裂けても言えなかった。

次の晩、クリスマスを楽しく過ごし子ども達がサンタの夢をみている頃…。食べ過ぎた私は、ひとり後悔を胸に、息を切らせながらカローリ消費という汗を必死に流していた。

◇五月飾りと汗

富士本昌恵

桜の花が咲く頃は、いつも初夏の準備をし

ら、もう少しだけ、準備をしていたいな、と思うのでした。

◇冷汗

藤原明美

今から三十余年前、初夏の昼下がり。長女は這い這いを始めたばかり。すやすやと寝息を漏らす。私は洗濯物を取り込みめにベランダに出て、部屋に戻ると長女の姿が見当たらない。浴室、洗面所、台所のどこにも見当たらない。すると玄関のドアが開いているではない

か。アパートの一階に駆け降りると、数十メートル先の駐車場の手前の道路を渡ろうと這い這いをしてる長女を発見。足は震え動悸は止まらず冷汗が全身を流れた。この冷汗と衝撃が後々の私の子育ての心配性を深くした。今では社会人として忙しく仕事をする娘であるが、旺盛な好奇心から無茶をしないか、心配せずにはいられない私がいる。

◇皇居勤労奉仕の汗

針谷忠郎

四年前の十二月一日、大分県日赤の「皇居勤労奉仕ツアー」に妻と参加し、朝八時に全国からの二百人と共に皇居前に集合した。皇居の桔梗門を潜ると、自然が広がり清々しい空気に満ちていた。宮内庁職員の手指示で掃除道具を持ち、四列に並びで富士見櫓から急勾配の坂を登り、一般公開のない持ち場に着いた。二日目も皇居内の各地、三日目は赤坂御用地の除草や清掃に奉仕した。十二月でも晴天下の作業では大汗をかく。着替えができないので背中にタオルを入れて凌いだ。四日目皇居の奉仕後に、天皇皇后両陛下から「ご会釈」を賜る光栄に浴した。四日間の作業で大汗をかいたが、まるで「奉仕者のための皇居スペシャルツアー」であった。



「池袋・新しい空気と素朴な空気」 鈴木 崇

都内の会社に十年ほど勤めている頃、街に出るといって一番身近なのは池袋だった。会社の慰労会などもよく行なった。仕事終わりにもやもよとした気分が残る夜は、平日のレイトショイを覗に出たりもした。く

すぶつた気持ちをなだめすかすには、池袋のよくな狼狽な街がちよつとよかつた。

池袋駅東口には大型書店が複数あり、本を探すには困らなかつた。明治通り雑司ヶ谷方面に歩くと、品揃えのよい古書店があり、定期的に通っていた。

この辺りまで来ると鬼子母神まで足を延ばしなくなる。ススキの穂で作ったミミズクの郷土玩具が有名だ。素朴でユーモラスな姿に心が和む。境内には江戸時代から続く駄菓子屋もあり、ノスタルジックな時間が流れている。

月に一度、週末に行われるハンドメイド雑貨の青空市には老若男女問わず集まり、思い思いの楽しみ方で境内はにぎわう。都電荒川線近くの商店街では古本のフリーマーケットを定期的

に行っており、私も同好の士と出店したことがある。道路脇に腰を下し、通りを冷ややす通行人を眺めるのは新鮮だった。

鬼子母神は参道のケヤキ並木も気持ちいい。雑司ヶ谷の雨の響に鳴りけり

水原秋櫻子
参道の雰囲気をよく伝える句である。

裏手のアパートにかつて手塚治虫が住んでいたという。手塚が住んだアパートとしては椎名町のトキワ荘がよく知られているが、トキワ荘から移ってきたのが雑司ヶ谷の並木ハウスだったそう。

雑司ヶ谷霊園には多くの文学者が眠る。前述の古書店にはゆかりの作家コーナーが一角を占めるほどだ。夏目漱石、小泉八雲、泉鏡花、永井荷風……、私が敬愛する作家ばかりである。以前、墓参した際に漱石の

墓を拝んでいると、墓のそばに猫がひよいと寄ってきた。霊園内にはすいぶん演出家の猫がいるらしい。

池袋駅周辺はせわしなく人が行き交い落ち着かないが、外れにエアポケットのような公園がある。東口から歩いて五分ほどの場所の池袋南口公園。桜がきれいな公園で、かつてはおじさんが青空将棋を打っている

ような所だった。しばらくの閉鎖の後、リニューアルして様変わりした。一面に芝生が敷かれて開放感が増し、テラスやカフェが併設され、なんだか大学のキャンパスのような雰囲気になった。

見事、若者が集まるスポットに変貌したようで、公園周辺には新興コーヒーチェーンができていた。青空将棋のおじさんはどこへ行ったのだろう。池袋には新しい時代の空気とミミズクの郷土玩具のような素朴な時代の空気が混ざりあう街であってほしい。



池袋・南口公園



羽音集

選 栗人 成増



札幌 青木まゆ美

松戸 山岸明子

土浦 小林和子

松戸 針谷忠郎

草の芽の雨の膨らむ朝かな
水滴に青き空ありつくづくし
春の雪舗道に薄き靴の跡
囀や鈴ふるやうに雀どち
寄り添ひてかたまり出づる名草の芽
喉通る白湯のやさしさ風邪籠る
ゆらゆらと春の日差しが硝子戸に
よき知らせあり黄水仙揺れる午後
きのふけふ木蓮の白ことさらに
世の憂さを忘れ茅花の丘にゐる
筑波への道まつすぐに陽炎へる
春よ来い襤褸の嬰の立ち歩き
遠山を薄むらさきに雛の日
廃線の残る城跡春の雨
へアサロンの店主教へ子風光る
芽生えたる土筆が囲む一里塚
一碧湖ボート置き場の花辛夷
馬酔木咲くカフェテ
ラスへのアプローチ
うららかや午後の紅茶の馥郁と

令和二年度「鴻」結社賞・新同人発表

結社賞授賞

- 第十四回「鴻」賞 (豊橋)
荒井一代
- 第四回「鴻」特別功労賞 (松戸)
良知悦郎
- 第二回「鴻」特別賞 (牛久)
岩崎 俊
- 第十四回「鴻」新人賞 (松戸)
山岸明子
- 第五回「鴻」底紅賞 (喜多方)
田部富仁子

新同人発表

- 新蒼韻集同人 (豊橋)
荒井一代
- 良知悦郎 (松戸)
- 岩崎 俊 (牛久)
- 新底紅集同人 (土浦)
北川博司
- 新山彦集同人 (松戸)
山岸明子
- 青木まゆ美 (札幌)

令和二年度の結社賞及び新同人は以上のように決定いたしました。

「鴻」主宰 増成栗人

票庵閑話 24

